

# 洗平 もう悲運じゃない



## 光星甲子園

### 「任せろ」緊迫の最後 兄が弟救援

# 26年越し 父子の夢かなう

甲子園の常連・八学光星が22日、3年ぶりに全国切符を手にした。父の母校の門をたたいた千葉真出身の洗平歩人投手（3年）は、主将として、エースとして、チームの勝利に大きく貢献。「甲子園に必ず出る覚悟を持ってこの学校に来た」。宣言通り、父がかなえられなかった夢を26年越しに実現した。（野村遥）【本記1面】

光星学院時代、1年生から主戦を張った歩人の父・竜也さん（43）は六戸町出身。1994、96年、青森大会の決勝で3年連続敗退。大学卒業後にドラフト入りした歩人だが、順風

はなかった。1年目の夏はコロナ禍のあおりで「甲子園」そのものが中止に。去年は1点差の接戦をものにできず、準々決勝で敗れた。一度も甲子園の舞台に立てないまま終わってしまうのか。最後の夏を前に、歩人は部員と話し合ってから一戦必勝を全国制覇から一戦必勝に切り替えた。ミスをしたくない。気持ちを強く、口癖のように「一戦必勝」と繰り返す。当たり前のことを徹底する、負けないチームづくりの核となった。

「入学当初は『父と同じユニホームで甲子園に』との思いが一番だったが、3年間を過ごすうちに『この仲間と一緒に甲子園に行きたい』という思いが強くなった」。春には弟の比呂（1年）が入部。八工大一との決勝では、直前に二塁打を浴びた比呂からマウンドを受け継いだ。「任せろ」。残るアウトを7球で締め

【写真上】八学光星は9回裏に1点差まで詰め寄せられ、洗平比呂⑬が兄の歩人にボールを託す＝はるか夢  
【写真左下】優勝を決め、記念撮影で笑顔を見せる兄の歩人⑬と弟の比呂  
【写真右下】1996年夏の県予選決勝で力投する洗平竜也さん。だが3度目の夏も甲子園目前で涙をのみ、悲願は果たせなかった＝県営球場